和牛の香り漂うマンハッタン ＆古希を越えて、そぞろ歩き

西山　和宏（1組）

ニューヨークJFK空港の到着ロビーを出たのは正午過ぎであった。タクシー乗り場で、黒人婦人警官から乗車するタクシーのナンバーを書いた苦情連絡先を渡された。

JFKからマンハッタン中心部までのタクシー料金は、一律五十二ドルと定められており、チップ込みで六十ドル渡せばドライバーはニッコリである。

ドライバーに「景気はどうだ?」と聞くと「今日乗せるのは、あんたで二人目だ。三時間も待ったよ」「オバマケアはどうだ?」「いいね、うれしいね」などと会話をしながら、空港を離れてまもなく前方に早くも渋滞が見えた。

ドライバーは「まかしておけ」と幹線道路を離れて脇道に入った。イーストリバーに架るマンハッタンへの七本の橋は、今日はどこへ回っても渋滞だろうと言いながら、ときどき渋滞を脇目に、短い距離でもスイスイ走るときには「どうだ、やったろうー!」と歓声をあげることもあったが、タイムズスクエアのマリオット・マーキースへたどりつくのに二時間近くもかかった。

その日は、二〇一三年十月二十六日、ハローウィン前の土曜日。家族でのパーティが多く、ホテルの宿泊代はシニア割引でも五百九ドル、翌二十七日は二百八十ドルと割高であった。

はじめてマンハッタンを訪れたのは、一九七三年七月、今日ではスーパーマーケットやコンビニなどで普通に見られるバーコードと、POSシステムに関する調査とテストマシン購入のためであった。その折、市内観光バスに乗り、自由の女神のクラウンに登るなど楽しんだ。

今日では、マンハッタン南端にあるバッテリー公園のフェリー乗り場からスタッテン島行きのフェリー（無料）で往復すると、自由の女神を間近で見ることができる。

会社を退社独立後、スーパーマーケットや食品工場を中心に、流通業界研修ツアーのコーディネータとして、米国四十州以上を訪問した。

マンハッタンは、研修ツアーで十数回、プライベートでも数回は訪れた最も好きな街である。観光と買い物にも便利で、ミュージカルも楽しめる。ミュージカル観客で、英語のセリフが分かるのは三分の一以下といわれている。英語が分からなくても楽しめるライオンキングのようなミュージカルがロングランになっている。

今回のマンハッタン訪問、「和牛普及セミナー」は、アベノミクスの成長戦略、農産物輸出拡大の一環として、日本貿易振興機構（ジェトロ）と公益社団法人中央畜産会の共催で行われた「日本酒・国産牛肉普及セミナーおよびネットワークキング」特に国産牛肉（和牛）普及セミナー（以下和牛普及セミナー）のコーディネータであった。

なぜ、ミート（牛肉）のコーディネータを務めることになったか。

大学卒業後に入社した会社で、ドイツ製の料金計算ハカリのセールスを担当した。当時、デパートで使用されているハカリの年間総予算は、日本橋三越が最も多くて二十万円、新宿伊勢丹など他のデパートでは十万円でしかなかった。

私がセールスするのは最も安いもので一台約三十万円。今日、どこでも見られるデジタル・ハカリは百五十万円、肉や魚のパッケージに品名と値段を貼るラベル発行するラベルリングマシンは約四百万円、そのラベルを自動貼り付けするマシンは約七百万円であった。

同じドイツ製でも、カールツアイス製の会計機を担当ということで入社したが、入社後まもなく、その部門はなくなった。退社しようかとも思ったが、とりあえず石の上にも三年で、与えられたことを精一杯やることにした。

一九六〇年代に入ると、日本にもスーパーマーケットが現れ始めた。スーッと出て、パーッと消えるからスーパーだと揶揄されることもあった。

当時、流通革命や問屋無用論などが盛んに論議されおり、それらについては、学生時代に充分に学んでいた。

続々と新規開店するスーパーマーケットの経営者に会って、売り場や商品についてアドバイスをすると喜んで聞いてもらえ、次回の訪問を期待されるようになった。当時、卵はグラムの量り売りであったので、その値付け作業に三十万円のハカリを購入してもらえた。

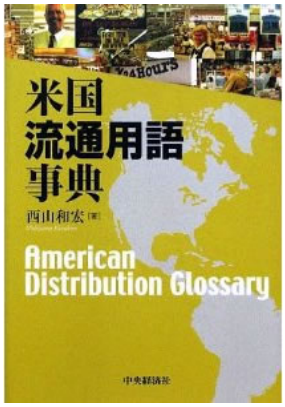
東京オリンピックが開催された後もしばらく、スーパーマーケットの精肉・鮮魚部門は、社外の専門業者への委託であった。直営にするためにスカウトした部門チーフの給料は店長よりも高く、中にはステテコでタバコをくわえながら仕事をする者もいた。

このような状況の改善策としてパッケージ販売を提案した。米国でもパッケージ販売は、まだ一般的ではなかったが、米国の流通誌には、導入や運営についての解

説記事が掲載され、米国農務省はマニュアルブックを出版していたので、それを取り寄せた。

専門用語は英和辞典には載っておらず、自分用の辞書を作成した。これを継続して四十数年後「米国流通用語事典」の出版になった。これには英語二千五百九十一語（見出し千五百五十五語）、和語二千六百五十三語が収録され、単独著者では、日米初として「米国議会図書館」に収蔵された。

今もネットで米国流通業界のニュースを検索して、新しい用語の収集を継続している。



肉の色が鮮紅色から暗褐色に変化するメカニズム、牛肉は熟成でウマミが増すが、なぜ豚肉や鶏肉にはそれがないのか、パッケージによってミートの鮮度保持ができることなどを説明すると、経営者も精肉の職人も興味深く聞いてくれた。

また、パッケージによる作業効率の向上などのメリットを説いて、四百万円のラベリングマシンを購入してもらった。

ダイエー、西友、イートヨーカドーなど、当時、売上上位十社を担当し、店舗がオープンすれば納入という状態になり、それらの社内研修会や業界協会のセミナーでの講師、業界紙への執筆、ＮＨＫの番組制作を手伝うこともあった。

ミート部門のチーフの腕の善し悪しは、挽肉の挽き目に現われる。挽き目が美しいほど腕がよい。挽肉作りは高度の技術を要し、腕がよいチーフならパートにまかせず自分で挽くものである。

また、そのようなチーフは、作業中にまな板に載せておくミートの量が少ない。短時間に処理できる量だけ冷蔵庫から出すことによって、温度が高い場所に置く時間を短縮してロスを削減する。

日本でも農林水産省がミート・パッケージ・センターの開設を助成するようになり、そのための資料作成、助成先への説明を手伝った。

このような活動を通して、ミート業界と深く関わったことと、米国の流通業界に詳しいということから、今回、日本の和牛を初めて、米国に紹介するイベントのコーディネータを務めることになった。

役割は「和牛普及セミナー」を支障なく成功させるために全般的な調整、英文パンフレットの監修、講師の原稿チェック、通訳に業界用語の説明、そして、現地スーパーマーケットの案内と解説であった。

マンハッタン到着の翌三十日は日曜日、土曜・日曜にマンハッタンを歩いているのはほとんど観光客である。気温は約十度と少し寒かったが、天気はよかったので、散策をかねて、一行約二十名をスーパーマーケット視察へ案内した。

タイムズスクエアのマリオット・マーキースからバスで、セントラルパークの左下角に位置するコロンバス・サークルを抜け、ジョン・レノンが凶弾に倒れたダコタハウスの七十二丁目を左折、ブロードウエイを八十丁目まで行くと、最初の目的地「ゼーバース：Zabar.s」がある。

「ゼーバース」は、パリの「フォション」とともに、米欧のグルメを代表するストアである。店内に入ると、まず数百種類のチーズ、奥にはいつも買物客が注文の順番を待っているデリ・カウンター、二階にはお土産にも適した珍しいキッチン用品がある。

「ゼーバース」を有名にしているスモークサーモンのスライスを食べながら、コロンバス・サークルへ向けて、フェアウエイ、シタレラ、ターゲットなどのスーパーマーケットを覗きながらブロードウエイを徒歩で下ると、やがてオーガニック・スーパーマーケットとして最大手のホールフーズ・マーケットの前にたどり着く。

ホールフーズで、ドライ・エイジング・ビーフの販売を見て、流石にステーキの本場だと一行は感心した。ここのスシ・カウンターで、ランチにスシ弁当を注文すると、日本語が流暢なバングラディシュ人の職人が野菜サラダ、餃子も入ったニギリスシの弁当箱を出してくれた。

そこを出て、セントラルパークの端を通り抜けると五番街だが、その辺りには観光客目当ての馬車が、年々増えている。ティファニーを覗いて、近くのロックフェラーセンターへ行くと、スケートリンクがオープンしていた。

これまで歩いたコースでは、ニューヨークの人たちが日常的な食品の買い物をどのようにしているか垣間見ることができる。

二十八日（月曜日）「和牛普及セミナー」が、マンハッタンの中ほどに位置するイベント会場「４０４」で行われた。入場者は、レストランやスーパーマーケットの経営者、マスコミ関係者など約四百名。

日本から運び込まれた最上級「和牛：K5」約三十kgが試食に供された。日本産の本物の和牛は、米国のグルメなら一度は食べてみたい「まぼろしのご馳走」である。

バラク・オバマ大統領夫妻は、米国産であっても「和牛」が大の好物。米国産「和牛」でも一人前百ドルを超える。ホワイトハウスで、ランチョンやディナーに「和牛」が供されると、贅沢だと書き立てられるので、それが極めて高価なことはだれでも知っている。

神戸ビーフが米国へ初めて輸出されたのは、二〇一二年十一月二十九日、クリスマス商戦の目玉として、ロサンゼルスの高級レストラン向けにロースとヒレの合計百七十三・五kg。これは、ハオンスのステーキで約七百七十人分。神戸ビーフを提供と称しているステーキハウスは、ロサンゼルスに百四十七軒、ニューヨークには二百九十二軒、ラスベガスには百五十六軒ある。

日本政府は、二〇一二年の牛肉輸出金額五十一億円を二〇二〇年には二百五十億円に拡大を目標にしている。

鹿児島県の黒毛和牛飼養頭数は、約三十三万四千頭（構成比十八・五%、二〇一三年二月現在）で全国一位、宮崎は約二十万四千二百頭で二位。海外では、二位のMIYAZAKIブランドは見られるが、KAGOSHIMAまたはSATSUMAブランドは見られない。これは何とかしなければならないと思っている。

《気が向くままに、気楽にそぞろ歩き》

さて、話題を一転。孔子の「七十にして心の欲する所に従って矩（のり）を踰（こえず」という教えをさほど意識したわけでもないが、なんとなくそのように思えるようになってきた。また、年齢を重ねればそれなりに、新しいことへの興味もわいてくるものである。

というようなことから、巣鴨駅近くで同期会が行われたとき、始まる前に近くの染井霊園を数名で歩いた。

そこらには、高村光雲・光太郎・智恵子、岡倉天心、二葉亭四迷、安岡正篤、若槻禮次郎、樺山資記（薩摩藩出身、伯爵、白洲正子の祖父）千葉周作、芥川龍之介、遠山金四郎、森山多吉郎（ペリー来航の際の通訳）司馬江漢、陸羯南（くが かつなん：正岡子規の支援者）水原秋桜子などの墓石があった。

平成二十四年九月、生麦事件から百五十年の節目の年「生麦事件と横浜の村々：横浜市歴史博物館主催」の講演会に数名で出席。これに先立ってかねて懸案の生麦事件史跡地および「生麦事件参考館」を訪問した。

横浜外国人墓地にある生麦事件で殺傷された「チャールズ・L・リチャードソン」の墓標には「Sacred to the memory of C.L. Richardson Late of Shanghai Aged 28 years who was cruelly assassinated by Japanese on the Tokaido near Kanagawa September 14 1862」とある。

その線部分は「・・・日本人によって残酷に暗殺された」である。（政治家や指導者の）殺害を意味する「assassinate」という表現は、後世に間違った事実を残すことになる。

今年一月十七日、東京・大手町の日経ホールにて「明治維新 The 150th アニバーサリー：薩摩から新たな時代へ」が開催され、伊藤祐一郎鹿児島県知事、黒岩祐治神奈川県知事、原口泉志学館大学教授、島津忠裕島津家三十三代・島津興業副社長などが出席し、話しをされた。

これらの方々に「・・・残酷に暗殺」について、これがどのように間違っているか資料を添えて写真を送りました。

平成二十五年六月、これもまた延び延びになっていた「東京ゲーテ記念館」を訪問。記念館創設者、粉川忠（こがわただし「夜の旅人：阿刀田高著」のモデル）の娘さん、粉川美那子さんの特別な計らいで、ゲーテ関連の膨大な図書と資料が収納されている書庫に入らせていただいた。

その脚で「ファウスト」の最初完訳者、森鴎外の記念館を訪問した。その後、谷中銀座、夕焼けだんだんなどを散策し、シャレー・スイスでチーズフォンデュを賞味した。

ファウスト（高橋義孝訳）の口上の中に、

不運にも面白い目を見ずに死んでしまった
親しい人たちの名を呼んで悼むのだ。

とある。われわれは幸運にも面白い目を見ながら、生きている。

平成二十四年一月、日本ボランタリーチェーン協会の新年賀詞交歓会で、甘利明内閣府特命担当大臣の挨拶に続いて、なんと加治屋義人先輩が農林水産副大臣として挨拶に登壇された。

「私も玉龍です」と声をかけると、非常に喜んでくださり「お茶でも飲みに、是非いらっしゃい」とありがたいお言葉。早速、有志に声をかけ、折角ですからと議事堂内の見学をお願いした。

秘書の池田邦茂（玉龍で元生徒会長）さんの案内で議事堂内に入ると、幸運にも参議院本会議を傍聴し、安倍晋三総理大臣、麻生太郎財務大臣などの演説を聞くことができた。お昼に議員食堂で昼食をご馳走になっているところへ尾辻秀久さんがご挨拶に来られた。

農林水産副大臣室に場所を移し、加治屋さんを囲み、野球部員の藤田晃洋君、人並み以上に応援に熱中した稲森悦郎君など、当時の試合のスコアを見ながら思い出話をひとしきり。副大臣の椅子に座らせていただいて記念撮影をした。

甲子園出場でも野球部員が少なかったのは、レギューラになれないと退部して勉強に集中したからだそうです。

生憎の雪の日ではあったが、場所を有楽町のニュートーキョウに移して、ワインとソーセージなどで、延々六時間あまり話は尽きなかった。

最後ではあるが、最も重要なこととして、八期通信は今回で最終になりそうとのことであるが、是非とも継続をお願いしたい。

紙媒体での八期通信は休刊でも、ＰＤＦ形式などでの送信やネット上での掲載をお願いしたい。この手間のかかる厄介な役割を是非とも、大石慶二君にお引き受けいただきたい。

自分でパソコンを操作しない方は、子供や孫たちに協力をお願いすることで、ジジババの交遊の広さを認識させる副産物を得られる。

そのために、できれば年に二回、正月とお盆の家族が集まりそうな時期に見られるようにお願いしたい。

玉龍でもまれな特筆に値する「八期通信」の継続をお願いします。

八期通信アーカイブス

2005年 第11号
吉村　弘子（5組）

スポーツ大好きだった私は、玉龍に入学して、どの部に入ろうかと迷った。中学時代はバレー部で、背の低い私は、泥まみれになって拾うことばかり。そこで、短距離走が得意だったので陸上部を考えた。中学時代、鹿児島市陸上競技大会で、清水中は女子４００メートルリレーで優勝した。そのメンバーは、中村、松井、竹之内、田近。４人は共に玉龍に入学したので思い出深い。ところが、長田中からこの大会で１００メートル走トップのタイムを持つ平岡さんが入部していた。争う自信がなかったのでやめた。

身長に関係なく出来そうなのがテニスだった。末富節さんとダブルスを組めて、テニス部顧問の青柳先生に指導を受け、練習に励んだ。練習の甲斐があって、１９５７年に開かれた全日本軟式庭球大会（秋田県）に出場の資格を得た。団体戦は鹿児島女子高だった。ところが、その頃、野球部絶頂、バスケット部、体操部と大会出場が決っており、たった２名なのに運動部の予算がないと出場を断られた。２人だけで出場させるわけにいかない、引率もいるということだった。でも、あきらめられない２人は、校長室へ向い交渉した。簡単に認めてもらえなかったが、私達は自費で行く事を申し出た。

こうして、やっと池畑校長の許可が出て、引率については鹿児島女子高の祷先生（元、玉龍講師）に青柳先生が頼んで下さり、私達は鹿児島女子高と行動を共にしたのです。

全国から集った選手達に秋田県は、前夜祭で竿燈を披露して歓迎して下さいました。夏の暑い中、厚い布団をかぶり、白米のおいしかったことが忘れられない。試合には早々と負けましたが、出場出来たことに意義ありと、４８年たっても忘れられない思い出です。

八期通信アーカイブス

2008年 第14号
沖野　芳子（6組）

終戦後、奄美群島は日本本土と分離されていた。米国海軍軍政府、北部南西諸島命令により『大島支庁』の名称を変更して『臨時北部南西諸島政庁』と呼称することとなり、同時に鹿児島県とは遮断されてしまった。

昭和２８年１２月２８日、奄美群島が日本に復帰した。私が中学２年の時であった。万歳、万歳！

鹿児島の高校へ進学したい。希望に燃えて両親に胸の内をうち明けたが「経済的に無理だ」と、許可してもらえない。「蛙の子は蛙。百姓の子に学問はいらない」等と、祖父母も猛反対であった。一人っ子の私は、当然、農家の跡取りと決められていたようだ。

「私は農業はしない。財産を売ってでも学問をさせてほしい。私の身に付けた財産は、泥棒や火事にあっても無くなることはない」等、懇願して、ようやく説き伏せに成功。

いざ、鹿児島行きとなると船旅である。当時は、接岸施設はなく、貸客は全て手こぎのハシケで、しかも沖合１,０００メートルの洋上に停泊する本船（金十丸５００トン）まで、遠浅のサンゴ礁の間を縫うように往来する。そのうえ夜間寄港の為、人命をも脅かす極めて危険な状態であった。それは、沖合では波のうねりも大きく、上下に揺れるハシケが上にきて、本船の舷門と平行になった時「サァ今だ」と飛び乗る。命がけであった。

鹿児島に辿り着くまで２泊３日。船は上下左右に揺れに揺れ、鹿児島港に到着する頃は、胃液まで吐露する有様。

当時は、電話もテレビもなく、島との情報交換は文通のみ。玉龍に入学できた事で、私の人生バラ色と大喝采だった！